
普遍少年と不可思議少女

.png

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

普遍少年と不思議少女

【Nコード】

N3517K

【作者名】

.png

【あらすじ】

普遍的少年 桐竹啓と不思議少女 椎名秋乃の織り成す不思議系ラブコメファンタジー。

#0 普遍的日常の崩壊間際

ある日のこと――

「今日からここに泊まるわ」

「はい？」

少年 桐竹啓きりたけいの家の玄関で、少女 椎名秋乃しいなあきのがそう宣言した。

―― 一体彼女は何を考えているのだろうか…

「理由は、貴方の監視のためよ」

そんな啓の思考を読むかのように放たれる有無を言わせない秋乃の鋭く、冷たい声。

「…まあ、中で詳しい話は聞かせてもらおうよ」

そんな厳しい彼女の言葉に屈服する啓。

外の天気は雨。まるで現在の啓の心情を表しているかのような天候だった。

#0 普遍的日常の崩壊間際（後書き）

知ってる方にはお久しぶりです。初めての方は初めまして。作者の
pngです。

どうも僕はファンタジー分が少し混ざって他方が書きやすいようにで、
今回もファンタジー分追加ですが、どうぞ宜しくお願いします。

#1 不可思議現象の普遍的日常闖入

桐竹 啓きりたけ けいは困っていた。

「よう、俺」

目の前にもう一人の啓がいる。世界にはそっくりの人が3人いると言うが、今の発言には違和感を覚えた。

「…一体、君は誰だ？」

「ふむ、興味深い質問だな。俺はお前であって俺である、と言っておこうか」

そう言つて、二人目の啓はケタケタ笑う。

「答えになっていないんじゃないのか？」

ますます困惑してきた、そう言いたげな声で啓は言った。事実、啓は困惑している。

「さあ、どうだろうな。っと、もうそろそろお暇するよ、俺」

「あ、ちよっと…」

啓が言い切る前にもう一人の啓は姿を消してしまった。

「何なんだったんだ、一体…」

時刻は夜。秋乃がやってくる前日のことだった。

次の日、天候は雨だった。

「今日はいつもより早く出ようかな」

そんな中、啓は夜の出来事もすっかり忘れて朝食の準備をしていた。両親の出張のお陰で一人暮らしをしている彼は家事も一通りこなしている。

今日の天気は雨、朝食を作っているときに違和感を覚えたのだが、それは悪天候から来る忙しさで消え、忘れてしまっていた。

啓の通う羽山学園は啓の家から十分ほどのところにある学校である。施設は申し分ないほどに充実しており、このあたりの学校の中でも人気校だ。

啓はその学校の一年D組に所属している。

「あ、椎名さんおはよう」

「…おはよう」

そんな啓の隣の席に座って読書に興じているのがクールビューティーとして名高い椎名秋乃だ。

彼女はクールと言うよりは冷淡で交友関係は狭い。そんな彼女が啓と交友を持っているのは隣席故にだろう。しかし彼女から話しかけることは滅多に無く、大概是啓から話しかけていた。

「ねえ、桐竹君」

「えっ、どうしたの？」

だからこそ彼女が話しかけられた時、啓は驚いたような声を上げてしまった。

「…そんなに私が話しかけるのって珍しいかしら？」

彼女は不服そうに言う。

「そ、そんなことないよ」

明らかに同様をしている啓。珍しいと言っているようなものである。

「まあいいわ。それで貴方、今日何か違和感を感じなかったかしら？」

「…違和感？」

「ええ、違和感よ」

啓は自らの記憶の引き出しを開け、的中。違和感があったことを思い出した。

「…あったことはあったが、何かは思い出せない」

「じゃあ今、自分の姿を見たら？思い出すわよ、きつとね」

そう言っただけで彼女は読書を再開した、まるで何も無かったかのように。そこで啓は自らの姿を確認してみることにした。胴体、腕、脚。しかし特に何も変わったことは無い。腕も動けば脚も動き、指先だっ

て思うがまだまだ。

「椎名さん、何かおかしいんだ？」

訝しげな目つきで自分を見ながら啓は訊いた。

「…自分を見るより自分の周りも見ろほうがいいかもしれないわ」
彼女は手に持ったハードカバーから目を離さず独り言のようにそう呟いた。

その彼女の言葉を聞いて自分の身体の周りを見る。するとすぐに違和に気が付いた。

「…無い？」

——彼の影がなくなっていた。

昼休み、クラスメイトが学食を食べにいたり弁当を広げたりする中、啓と秋乃は屋上で話していた。

話題はもちろん啓の影についてである。

「椎名さん、僕に影が無いのは何で？」

朝の秋乃の口ぶりからこの一件に彼女が関わっていると啓は踏んでいた。

「貴方最近、不思議な現象に遭わなかったかしら？」

「不思議な現象？」

「ええ。例えば、ドッペルゲンガーとかかしらね」

ドッペルゲンガーとは少し違うが、昨夜、啓は不思議な現象に見舞われた。

「…確かにあったな」

「ならそれが貴方の影よ」

「影…。じゃあ僕の影は勝手に逃げたってこと？」

「正確に言うと違うけれど、大体はそんな感じよ」

秋乃は簡単にそういった。しかし——

「待って、全く話についていけない」

——啓は理解できていなかった。

「はあ、でもまあ当然の反応よね」

秋乃は呆れたような、面倒くさいような顔つきで話し始めた。

「貴方の見たもう一人の貴方は貴方の影、つまり化身レプリカのような者よ」

「レプリカ？」

オリジナル

「ええ。つまり本物であるあなた自身、桐竹啓レプリカの化身、それが貴方が出会ったもう一人の桐竹啓レプリカって訳。本当はこんなこと起きないんだけどね」

彼女はそう締めくくった。

しかし、この簡素な話を聞いて、状況が理解できるほど啓の頭は優秀ではなかった。

「ま、まあ大体は分かった——んだが。」

「…まだ何かあるの？」

秋乃の不服そうな低い声。

「椎名さんって何でこんなことを知ってたの？」

「…そうね。貴方もこっちの人になった訳だから教えた方がいいわね」

そう言つて口を開き、なにかを詠うように言いはじめた。

レプリカ

オリジナル

「我が化身よ。本物の契約の下、ここに顕れる」

彼女が言い終わった瞬間、屋上に一陣の風が吹いた。そして

「…椎名さんが二人いる？」

彼女、椎名秋乃の隣にはもう一人彼女に似た少女がいた。

レプリカ

レプリカ

「桐竹君。これが私の化身レプリカなんだけど、化身の説明からしたほうがいいわね、アキ頼むわ」

秋乃は隣にいる少女、アキにそういった。

オリジナル

「本物も説明すればいいのに」

そうアキは一人呟き

「ボクはアキ。そこで本読んてる秋乃の化身レプリカだよ」

そう告げた。啓は必死になつて状況を理解しようとして、それを断念しようかと考え始めていた。

#1 不思議現象の普遍的日常闖入（後書き）

ボクっ娘万歳！

#2 「普遍的部員の不思議現象との邂逅」

「ボクはアキ。そこで本読んでる秋乃の化身だよ」
「レプリカ？」

啓は先程、秋乃から簡素な説明を聞いただけで化身と言われても状況がわからなかった。

「あれ、まさか説明受けてない？」

「いや、受けたけど」

分らなかったとは自分のプライドが許さず言えない啓。

「…その気持ちボクもわかるよ。説明しなおすすめから」

もう一人の秋乃はそう言って、溜息をついた。

化身とは、自分の潜在意識が具現化したようなものでいうなれば、着飾っていない純粋な自分のようなものと言う。

それは人類すべてが生まれながらにして持つもので、大概の化身は影として存在しているらしい。しかし、それを持たずに影だけあるといった人が稀にいるのも確認されているようだ。

しかし、それらは実体を持たず自ら出てくることは無く、秋乃の様な特殊能力者——化身遣い（マスター）の召喚によって具現化することが出来る。その為、化身が自らの意思でこの世界に姿を持って出てくることは出来ない。筈なのだが——

「…でも、僕はそのレプリカとやらにあっただけど」

「それはボクじゃ、ちよつと分からないかなあ」

ははは、と苦笑いをもらすアキ。未だに難しい表情をしている啓。

そしてフェンスにもたれ本を黙々と読んでいる秋乃。そして、その秋乃が口を開いた。

「そろそろ時間よ」

風の中で消えたその言葉は啓の期待した解決への糸口ではなかった。

放課後、啓は悪友の藤枝達樹ふじえだつきと図書室の中、司書室にいた。理由は啓たちの所属する文芸部に参加する為である。

「なあ、啓。何で俺たちは文芸部に入っているんだ？」

「…お前が強制的に入部させたんだろ」

二人がこの文芸部に入っているのは、全て啓の向かいで座っているこの大男のせいである。

入学当初に『面倒だから』と言う理由で楽そうな文芸部に達樹が入り、それに連れられ啓も入部届けにサインをしたのが運の尽きだった。

「あら、貴方たち早かったわね」

その一番の原因は、今、図書館へと来た女性。きのしたまつり木下茉莉文芸部部长。通称、魔女である。

文芸部部員は、ほぼこの魔女の奴隷であり、逆らったものは何をされるか分からない。実際過去に逆らった部員が翌日から忽然と姿を消したという噂も流れている。

そんな訳で部員数、数人のこの部活動は、啓と達樹の中で酷く憂鬱なものになっているのだ。

「で、桐竹君。貴方、今日変ね」

茉莉が啓を視界に入れてしばらく経ってから、静かにそう呟いた。

「…変つて、どこがですか？」

——しまった。

啓はそう思った。しかし、後悔先に立たず。

「図星ね。分かっているでしょう？」

返答を切り出すまでに間が空いた。それだけで相手の動揺を魔女は見抜いていた。

「ええ、気づいたのは先輩が初めてですよ」

「…その嘘も、貴方に影が無いのとの関係があるのかしら？」

その魔女の一言で司書業務を静かに行っていた達樹も顔を上げた。

「啓の影……、本当に無いな」

しかし、その顔は実に愉しそうな顔をしていた。

「桐竹君、面白そうなことに巻き込まれてるわね」

魔女と大男はこの異常現象にも屈せずに啓に質問を浴びせる。

「啓、どういふことか話せよ」

「是非、教えて頂戴」

達樹はともかく、茉理の願いは命令だ。啓は諦め、話を信じてもらえるようにと願い始めた。

「ふうん、中々面白そうなことになってるじゃない」

一連の話を聞き終えた茉理は眼鏡を拭きながらそういった。

「成程。お前、面白そうなことに巻き込まれてるな」

茉理に続き達樹がまでもこの現象を『面白い』と称した。これに、この文芸部の姿が顕著に現れている。

ここの文芸部員は他人のごたごたが大変好きで、さらにはその事柄に首を突っ込まなければ気が済まないという性格をしている人が多い。

「で、桐竹君。解決策は見つかっているのかしら？」

この文芸部の魔女は今回の啓の身邊のごたごたにも首を突っ込む気でいるらしい。

彼女の双眸が妖しく輝いているのもいい証拠だ。いつに無く愉しそうな、期待したような表情をしている。

「いえ、まだです」

実際問題、何の対策も処してはいない。

そんな啓を見て口角を微かに吊り上げた茉理は達樹へと命令をした。

「その机の右から二番目の引き出しにあるKK-5のUSBメモリを取ってきて」

もちろん命令には逆らえずに取りに行く。

「で、桐竹君。その貴方のレプリカとやらは今、何処かに居るわけ

？」

「…そうなりますね」

それは啓が最も頭を悩ましている問題だった。

もしも、もう一人の啓が世間で何か問題を犯したら全て桐竹啓の問題になってしまう。それが問題だった。

「その問題はどうにもならないけど、私がどちらかを判断する材料はあるわ」

そう言つて茉理は先程達樹に持つてこさせたUSBを啓に渡す。

「これを見せてくれれば貴方が貴方であることはわかるわ。もし偽者だったら持つていないはずだから」

それは、単純な理論だ。

USBを持つていれば桐竹啓。持つていなければ偽者ということになる。

「じゃ、ずっと持つてますね」

「そうしていたほうがいいわよ」

——これでこの話は終わりだろうか

そう思つた瞬間魔女が一言、

「じゃ、椎名さんとアキつていう子を連れてきて」

魔女の命令を受け啓は席を立つ。

この広い学校の敷地の中でただ一人の人を探すのは砂漠の中から縫い針を探すようなもの、不可能に近いようなものだ。

しかし、

「あれ、椎名さん？」

「…何かしら桐竹君」

司書室を出たところにある図書室、そこに椎名秋乃はいた。

「いや、うちの部長が来てほしいって」

本来ならば、命令形なのだが。

「貴方、喋ったわね」

「…ごめん」

「まあいいわ」

そう言って呼んでいた本を閉じ、席を立つ。

「で、その先輩がいるのは司書室よね」

「あ、うん」

それだけ聞くと無言で彼女は魔女の住処へと足を進める。

そして、その扉を開けて中に入ったのだが、

「……………」

「……………」

秋乃と茉理の目が合った途端、二人とも黙り込んだ。

静寂。

（なあ、啓。これどうするよ？）

（どうするも、こうするもこっちは何もできないだろ）

（そうだよな）

居心地の悪い静寂の中でヒソヒソと会話を続けている啓と達樹。それを無視して魔女たちはずっと睨みあっている。

「…ねえ、貴方。アキって何者なの？」

そんな静寂の中、魔女が口を開いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3517k/>

普遍少年と不可思議少女

2010年10月28日08時03分発行